



赤塚不二夫のマンガ

三十年前（といっているのは一九七〇頃）、どこかで「少年サンデー」や「少年マガジン」を見かけるとすぐ手を伸ばしたものであった。

自分ではあまり買わなかった。貧乏だったせいもあるが、お目当てが赤塚不二夫の『天才バガボン』と『おそ松くん』、それと『巨人の星』だけだったからである。

その頃は赤塚マンガは生活の一部だった。いつもラーメン食べてるコイケさんや、竹ぼうきで掃きながら「おれかけれすか」としか言わないレレレのおじさんなんかは、まねをするのも簡単だったが、爪先伸ばして「シェー！」をするイヤミはなかなか難儀であった。腹が立つと「クーグラナイ、クーグラナイ」と大声で言った。

それにしても猫の「ニャロメ！」から毛虫の「ケムンパスでやんす」まで、どうしてあんなに次々とアイデアが浮かんだのか、今考えてもふしぎである。

『GQ』九月号が『赤塚不二夫の脳みそShayく』と題して特集を組んでいる。驚いたことに、当時はいささかキテレツだと思っていた赤塚キャラの面々が、今見るとどれもまことに真っ当な、筋金入りの人物、動物たちなのである。養老孟司が言っているとおりだ。「赤塚マンガが奇想天外なわけではない。世間の人間がひたすら固まっているだけのこと



赤塚不二夫のマンガ

なのである。」

『おそ松くん』の英訳も出ているが、あの底抜けのギャグはどうしたって翻訳不可能。それでも外国人が日本と日本人を理解するにはこれ以上のテキストはないかもしれない。残念なこと。今の日本ではもはや失われたにひとしいヴァイタリティではあるのだけれど。

初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇〇年九月

ホームページ掲載：二〇二一年十二月